平成２５年度　札幌市研究開発事業「小中連携」に係る実践研究

１．研究の内容・方法

研究推進校として、小学校３校と中学校１校を指定するとともに、併せて、下記の委員構成による**「札幌市小中連携に係る実践研究推進委員会」**を設置し、学習指導や教職員研修及び地域との連携など、「小中連携」についての実践的研究を行う。

２．委員構成

委員長	札幌市立真栄中学校	校　長	蛯名嘉津夫
委　員	札幌市立真栄小学校	校　長	成瀬　茂
	札幌市立美しが丘小学校	校　長	福家一俊
	札幌市立美しが丘緑小学校	校　長	角野　誠
	札幌市立真栄中学校	教　諭	入谷丈貴
	札幌市立真栄小学校	教　諭	辻　知行
	札幌市立美しが丘小学校	教　諭	阿部剛久
	札幌市立美しが丘緑小学校	教　諭	佐藤雅世
事務局	札幌市教育委員会	指導主事	伊達峰史・菅野智広

※上記の研究推進校は、平成２４年度の研究推進校でもあり、今年度は継続研究となる。

３．研究推進会議

（１）第１回研究推進会議

①日　時　　平成２５年7月１０日（水）１５：３０～１７：００
②会　場　　札幌市教育委員会　６階　Ａ会議室
③内　容　　事業概要について、研究の進め方について、研究計画や取組などの交流、実施上の諸課題について

―前年度の取組やアンケートの結果を踏まえ、今年度の取組について確認したこと―

○　９年間を通して、地区の児童生徒の何を育てるかを明らかにしていく。つまり、小中学校で共通の目標をもつ。その目標を達成していく手立てとして小中連携がある。
○　誰が担当になっても引き継いでいける持続可能な小中連携の在り方を構築する。
○　キーワードは「理解」し合うこと。
　・校種間の違いを「理解」。
　・小中連携のさまざまな取組について、その目的を「理解」。
○　小中連携を推進していく体制を構築する。

（２）第２回研究推進会議

①日　時　　平成２５年１０月3日（木）１５：３０～１６：４５
②会　場　　市立真栄中学校　１階ＰＴＡ会議室
③内　容　　道徳講演会の振り返り、研究計画や取組などの交流、実施上の諸課題について、研究の成果、検証のまとめについて

―道徳講演会「命～生き抜く力」相澤秀夫氏（宮城教育大学教職大学院）について―

○　今回のように、「小学生のためになる、中学生のためになる、教師のためになる」道徳テーマを設定することが重要。
○　講演会が講師による一方通行にならないように、児童生徒間の意見の交流場面を設定することが重要。今回は、講師が児童生徒の意見を吸い上げ、全体で共有していくことができた。
○　このような小中合同の講演会の中で、教師は児童生徒にどのように関わっていくかを、事前に講師や小中学校間の教師で確認しておくとよい。

（３）第３回研究推進会議

①日　時　　平成２５年2月２８日（金）１５：３０～１７：００
②会　場　　札幌市教育委員会　４階教育委員室
③内　容　　実施上の諸課題について、研究の成果、検証のまとめについて、次年度の研究計画や取組などの検討

―この１年間を振り返り、第１回研究推進会議で確認したことはどうだったか―

○　実践していく中で、小中連携による成果を感じ取ることができ、その必要性を理解することができた。また、１年間の実践は、次年度の見通し（計画）となって残り、実行性が増した。
○　各校の窓口が小中連携のコーディネーターとして機能した。
○　小中連携の取組は、児童生徒に対して何かを「育成」するというより、児童生徒の中で何かが「醸成」されていくといった効果がある。

４．平成２５年度の主な実践内容

（1）**美しが丘小学校への中学校からの出前授業**
①日　時　平成２５年8月２１日（水）
②会　場　美しが丘小学校
③内　容　英語・体育の授業
④参加者　６年生児童

（2）**真栄小学校への中学校からの出前授業**
①日　時　平成２５年8月２１日（水）・２２日（木）・２８日（水）
②会　場　真栄小学校
③内　容　音楽・英語・理科の授業
④参加者　６年生児童

（3）**真栄中学校生徒の小学校訪問**
①日　時　平成２５年9月４日（水）
②会　場　真栄小学校、美しが丘小学校、美しが丘緑小学校
③内　容　真栄中学校３年生による職業体験
④参加者　真栄中学校３年生、美しが丘小学校２・３年生児童、
美しが丘緑小学校５年生児童

（4）**小中合同道徳講演会**
①日　時　平成２５年１０月3日（木）
②会　場　真栄中学校
③内　容　道徳講演会
④参加者　真栄中学校生徒、各小学校６年生児童

（5）**真栄中学校小中連絡会**
①日　時　平成２５年１０月１８日（金）
②会　場　真栄中学校
③内　容　真栄中学校への授業参観と情報交流
④参加者　各小中学校教師

（6）**美しが丘緑小学校の真栄中学校合唱コンクールの見学**
①日　時　平成２５年１０月２５日（金）
②会　場　真栄中学校
③内　容　合唱コンクール
④参加者　美しが丘緑小学校６年生児童

（7）**真栄小学校との特別支援学級交流**
①日　時　平成２５年１０月２９日（火）
②会　場　真栄中学校
③内　容　合同体育学習
④参加者　真栄中学校、真栄小学校の特別支援学級児童生徒

（8）**同講師による小中キャリア教育講演会**
①日　時　平成２５年１１月8日（金）
②会　場　真栄中学校
③内　容　中学校の様子を知る交流会
④参加者　真栄中学校、真栄小学校、美しが丘小学校の特別支援学級児童生徒

（9）**同講師による小中キャリア教育講演会**
①日　時　平成２５年１１月１８日（月）
②会　場　真栄中学校（午後）、真栄小学校（午前）
③内　容　働くことの意義について（小中発達段階に合わせて）
④参加者　真栄中学校２年生、真栄小学校６年生

（10）**美しが丘小学校への中学校からの出前授業**
①日　時　平成２６年2月２１日（金）
②会　場　美しが丘小学校
③内　容　中学校に入る心構え
④参加者　美しが丘小学校６年生

（11）**各小学校同窓会入会式**
①日　時　平成２６年3月5日（水）～3月7日（金）
②会　場　各小学校
③内　容　真栄中生徒会による中学校説明、合唱部による演奏
④参加者　各小学校６年生児童

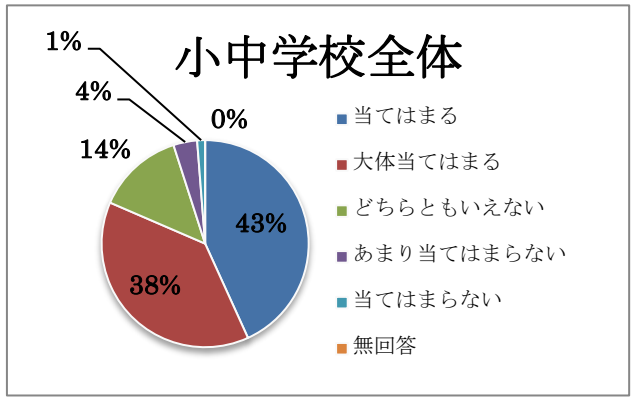
その他の連携内容
○　真栄中学校教師による各小学校への授業参観と６年生へ春休みの生活記録表の配布。
○　真栄小学校２年生による真栄中学校への学校探検と授業見学。（生活科の一環）」
○　まちの灯り事業※における小中の交流
※　きよたまちづくり区民会議が、清田区の豊かな自然や四季を感じるまちづくり活動の一つとして、清田区の冬の彩りであるアイスキャンドルを灯す取組
○　美しが丘緑小学校における「ネットトラブル」についての授業。中学校に実態等の情報を得た上での授業づくり。

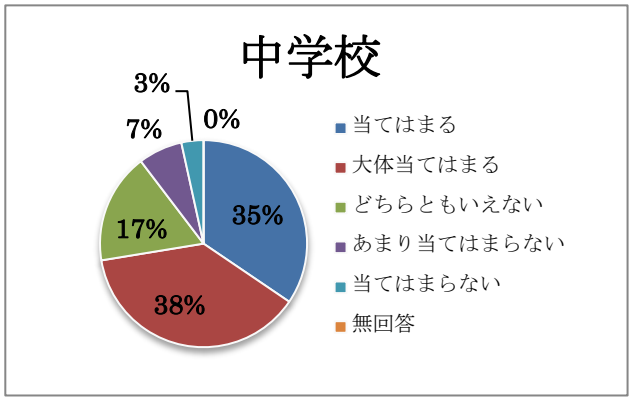
５．平成２５年度　研究推進校アンケート分析（教師）

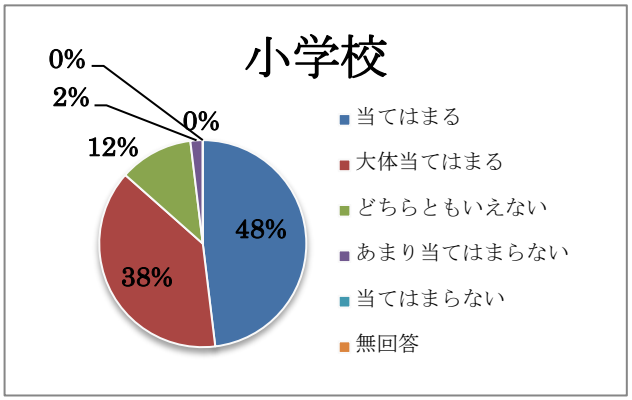
対象校：真栄中学校（回答者２９名）　真栄小学校（回答者２２名）　美しが丘小学校（回答者２１名）　美しが丘緑小学校（回答者９名）
→中学校２９名　小学校５２名　小中学校８１名

（１）　これまでの取組について

1　これまで本校が行ってきた小中連携の取組について、目的や必要性を理解している。







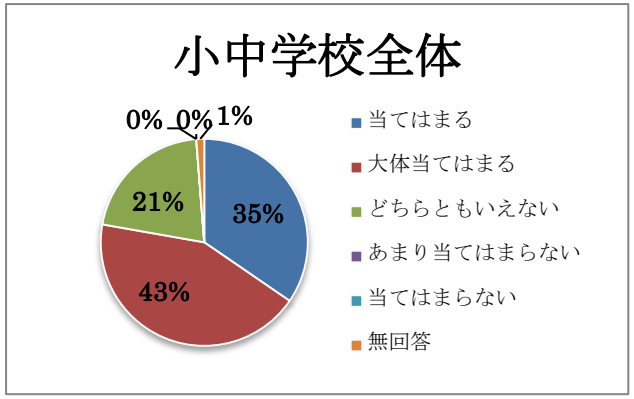
「これまで本校が行ってきた小中連携の取組について、目的や必要性を理解している。」という項目については、肯定的な回答をした教師の割合は、中学校において７３%、小学校において８６%となっている。研究推進校においては、小中連携の具体的な取組を通じて、小中連携の目的や必要性の理解が進んできている。

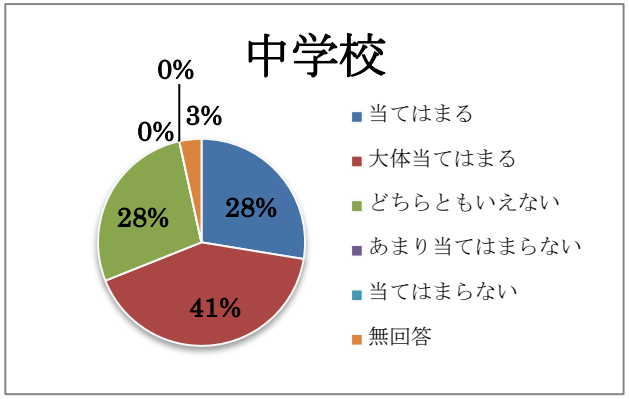
〈参考〉―小中連携の目的とは―（中央教育審議会の資料から）

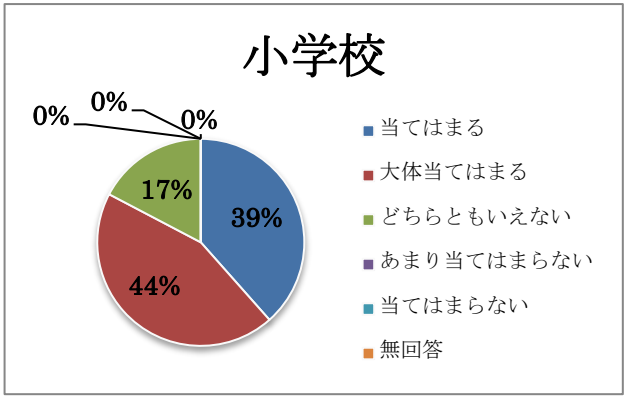
○　小学校から中学校への生徒指導に関わる接続を円滑化すること。
○　小学生の中学校進学に対する不安感を軽減すること。
○　異校種間の触れ合いによる自尊感情の醸成。
○　義務教育の目的（学校教育法）、目標（教育基本法）に掲げる資質、能力、態度等をよりよく養う。
○　義務教育段階の教職員であることの認識向上。

（参考資料：「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」H24.7.13　中央教育審議会初等中等教育分科会　学校段階間の連携・接続等に関する作業部会）

2　これまで本校が行ってきた小中連携の取組について、成果があったと思う。

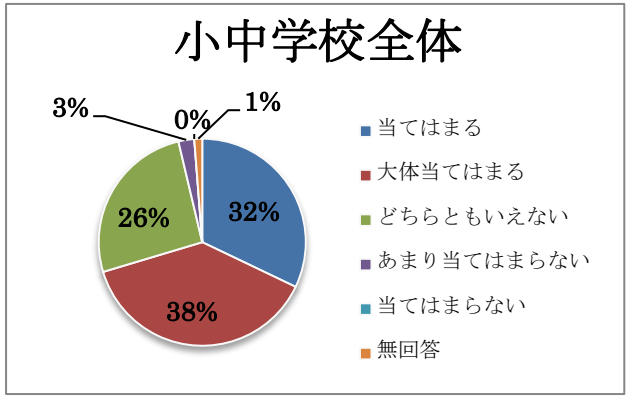


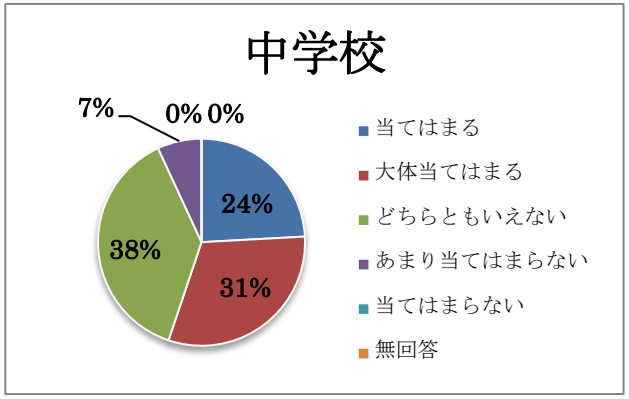


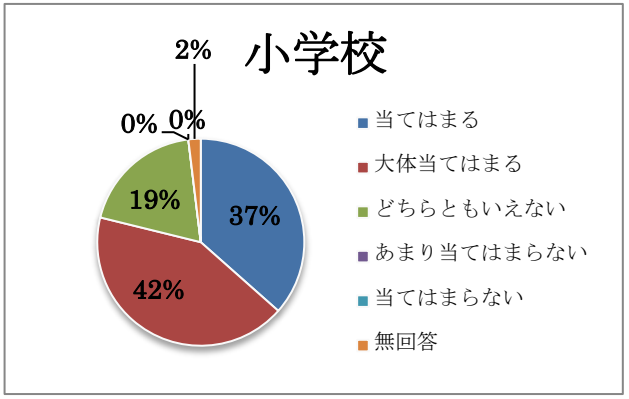


「これまで本校が行ってきた小中連携の取組について、成果があったと思う。」という項目については、肯定的な回答をした教師の割合は、小中学校全体で７８%、中学校において６９%、小学校において８３%となっている。研究推進校においては、教師間で小中連携の成果を共有することが必要である。

3　これまで本校が行ってきた小中連携の取組について、さらに充実したいと思う。



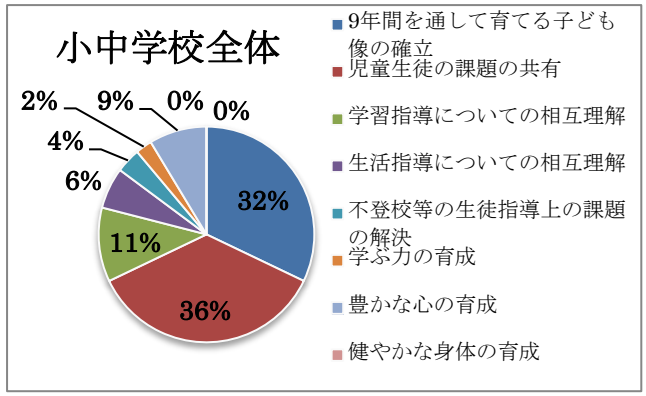


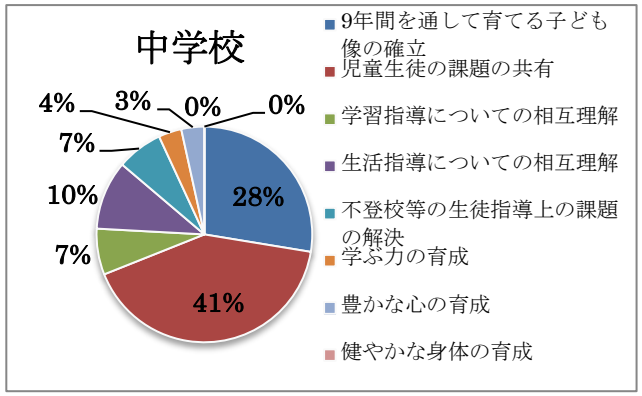


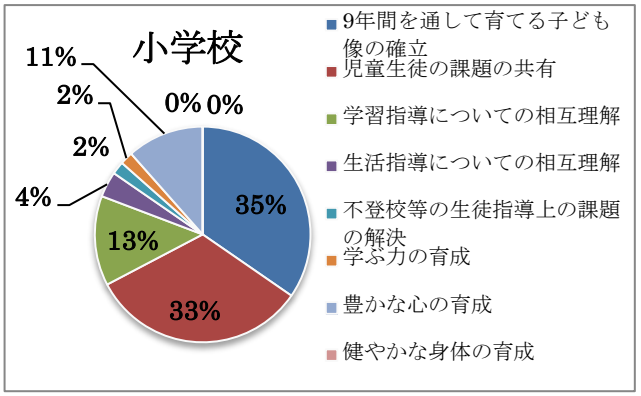
「これまで本校が行ってきた小中連携の取組について、さらに充実したいと思う。」という項目については、肯定的な回答をした教師の割合は、中学校において５５%、小学校において７９%となっている。「どちらともいえない」と回答した教師の割合が、中学校において３８%あり、その理由として、「時数的な問題」や「担当者の負担」が、自由記述から読み取れる。研究推進校においては、小中連携を推進していく効率的な体制づくりが必要である。

（2）小中連携に対する意識について

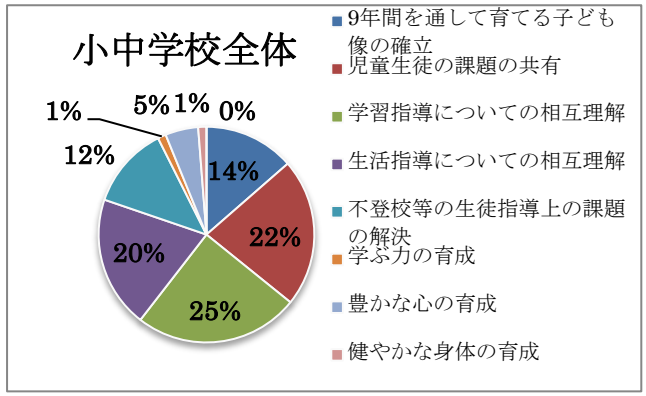
1　小中連携の効果として１番期待すること。

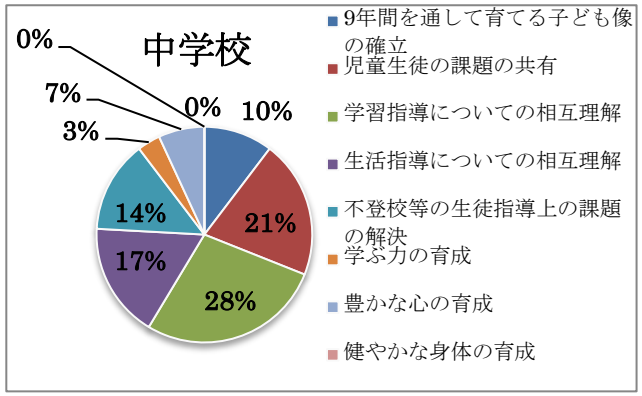


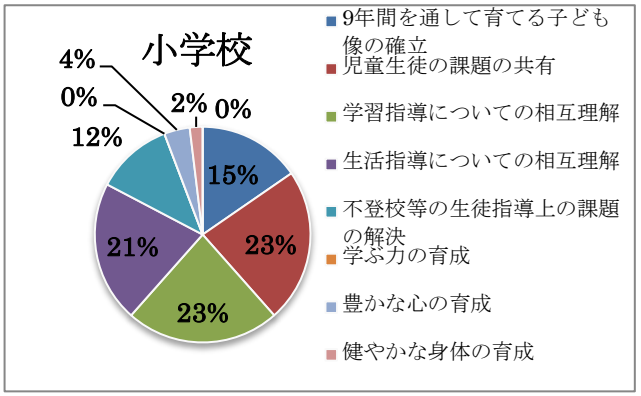




2　小中連携の効果として２番目に期待すること。



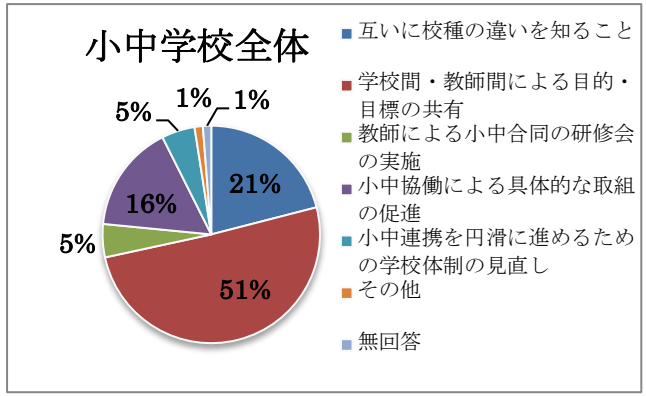


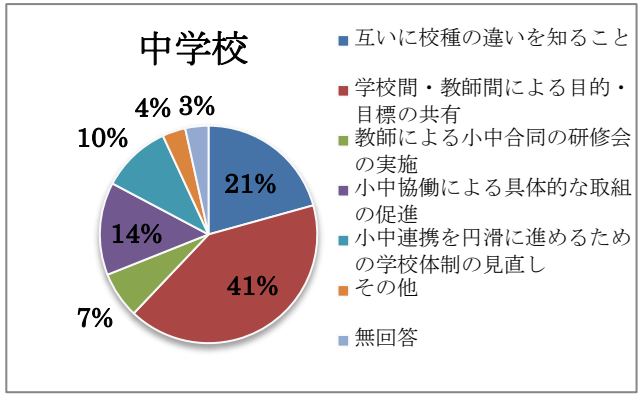


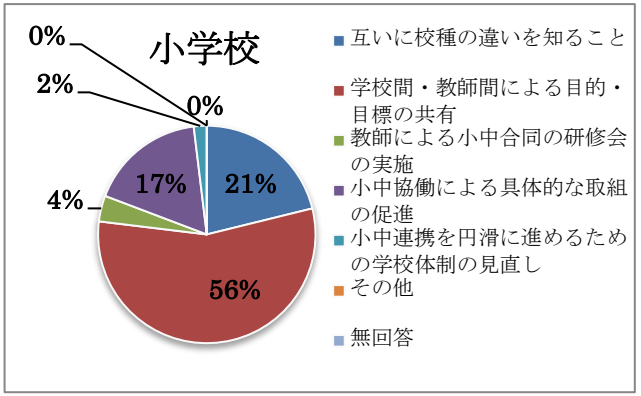
「小中連携の効果として期待すること。」という項目については、小中学校ともに、「児童生徒の課題の共有」「９年間を通して育てる子ども像の確立」が上位を占め、次に「学習指導についての相互理解」「生活指導についての相互理解」が続いている。研究推進校においては、児童生徒の実態を把握した上で、小中連携の目的・目標を設定していくことが重要と認識している教師が多い。また、小中学校ともに、小中連携を具体的に進めていくことによって、指導方法やその内容について、校種の違いを互いに理解することができるものと期待していることが分かる。

（3）これからの取組について

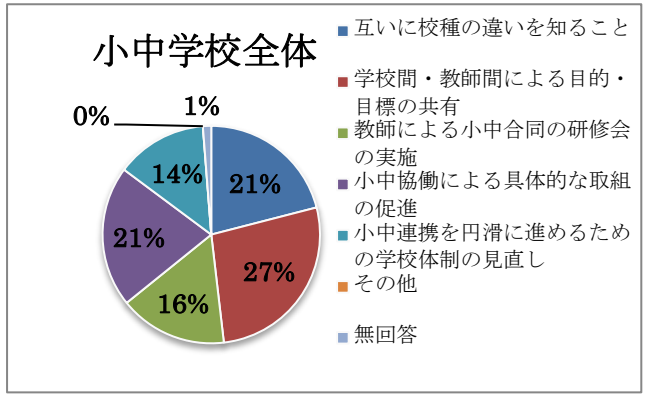
1　今後、小中連携を進めていく上で１番大切に思うこと。

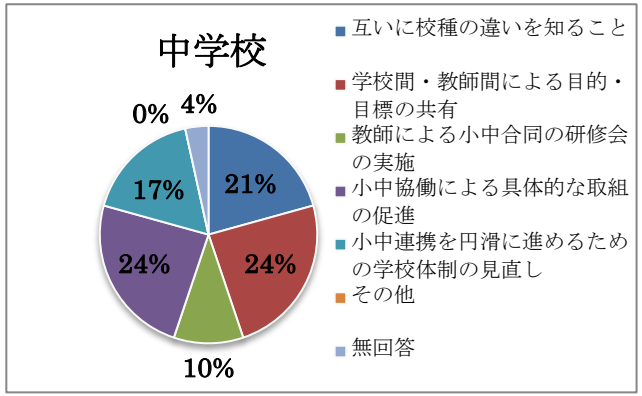


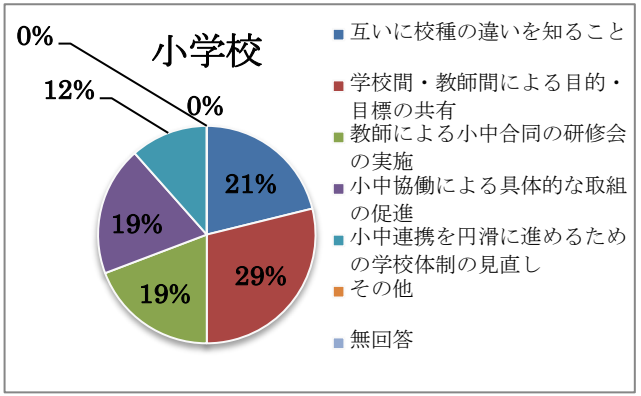




2　今後、小中連携を進めていく上で２番目に大切に思うこと。

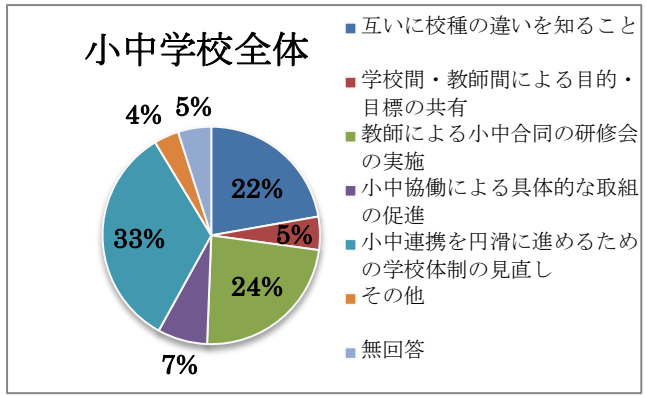


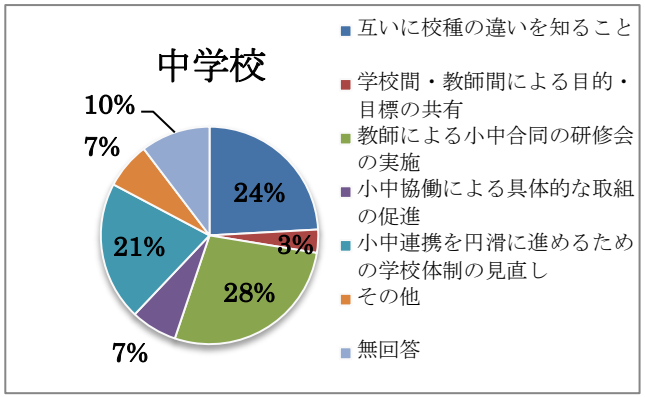


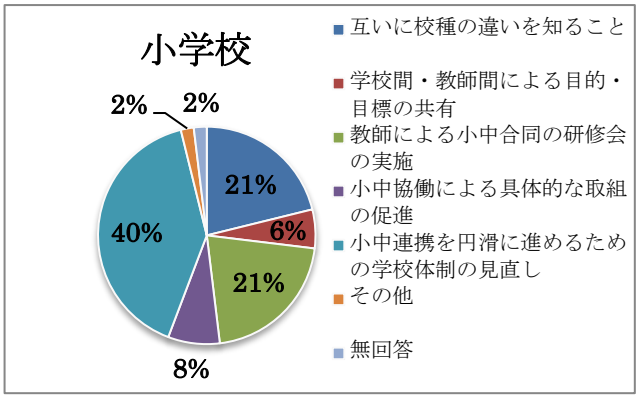


「今後、小中連携を進めていく上で１番（２番目に）大切に思うこと。」という項目については、「学校間・教師間による目的・目標の共有」と回答した教師の割合が最も大きく、「互いに校種の違いを知ること」と回答した教師の割合が２番目に大きい。研究推進校においては、小中連携における共通理解を図ることが大切であると考えている教師が多いことがわかる。また、「小中協働による具体的な取組の促進」と回答した教師の割合も大きく、実際にアクションを図っていくことの必要性も伺える。

3　今後、小中連携を進めていく上で５番目に大切に思うこと。







「今後、小中連携を進めていく上で5番目に大切に思うこと。」という項目については、小中学校ともに、「小中連携を円滑に進めるための学校体制の見直し」と回答した教師の割合が最も大きい。つまり、「その他」を除く５項目のうち、「小中連携を円滑に進めるための学校体制の見直し」の重要度が最も低いということがわかる。（1）3において、「小中連携を推進していく効率的な体制づくりが必要である。」と分析したが、「体制づくり」が小中連携の課題なのかどうか、課題であるとすればどういう点が課題なのかを、追究していく必要がある。

「今後、小中連携を進めていく上で１番（2番目に）大切に思うこと。」という項目については、「互いに校種の違いを知ること」と回答した教師の割合が大きいことはすでに述べたが、「今後、小中連携を進めていく上で5番目に大切に思うこと。」においても、小中学校ともに、回答した教師の割合が比較的大きい。つまり、「校種間の違いを知っている」教師と「校種間の違いをあまり知らない」という教師が二分化していることが予想できる。

（3）　自由記述より

【中学校】

○　長く続けるためには、無理のない活動が大切。そのためには、ある程度、**定番化していく**必要がある。

○　四つの小学校と一つの中学校という関係ですが、**教育の目的・目標を共有**し、義務教育９年間を一貫性のあるものにできれば良いなと思います。

○　中学校からは４校へ発信するが、**小学校間で**取組のバラつきがないように**連絡調整**を行ってみては。

○　**目標の設定**、そのため（実現するため）の**時間確保**。無理せず、できるなら行う。

○　中学校として、中１ギャップの解消と魅力ある学校づくりを進め、**子どもたちにアピールしていく**必要がある。それらの取組を通して、地域からの信頼される学校にもつながるものと考える。

○　小中間の交流の機会を増やす工夫があれば良いと思う。**相互に児童生徒の学校生活の様子を観察し合う機会**を持つなど。

○　**互いの授業を交流するだけで**互いのことがよくわかり、自分が連携のために何をするのかが見えてくると考えます。

【小学校】

○ 年度初めに、**前年度に行われた連携、今年度の実施予定**の資料をいただけると、計画的に準備をして取り組めると感じました。

○ 小中連携だけでなく、将来的には高等学校も含め、今以上の大きな連携のシステム化が図られるのかなと思います。

○ インターネットトラブルの低年齢化など、小中が連携することの重要性は一段と高まっているので、**全市的にも広げて**いけたらと思います。いち早く取り組ませていただき、ありがとうございました。

○ 今年度は中学校の先生による授業、道徳の講演会、２月に行われる中学校生徒指導の先生による授業など、連携事業としての取組がなされてきたが、**時数的な面、担当者（今年度は主に中学校の先生方）の負担を考えると、これ以上の充実はどうか**とも思います。

○ 窓口を担当しておりますが、本事業の取組を今後も引き続き職員に普及し、共通理解を得て、取組への協働を促していきたいと考えます。

○ **中学校で求められているものが見えておらず**、小学校６年間での子どもの育ちしか、具体的な姿を想像できていない。子どもの姿を教員同士の意見交換などで、交流を深めたい。

○ 音楽や英語などの教科について、**専門性の高い中学校の先生の授業を、５・６年生が受けられる機会**が欲しいです。

○ 取組の促進は望むが、**お互いの負担にならない形**をとっていければと思います。

○ **互いの校種のことを尊重**することが大切だと思います。

○ **目標を共有**し、育てたい児童生徒像を明確にした上で、**小中一緒に授業改善**を図る。中学校の授業をもっと見たいし、小学校の授業をもっと見てほしい。

○ 連携が進んでいる学区だと思います。良いことだと思います。

２年間の小中連携の取組による児童生徒の変化（平成２５年度　第３回研究推進会議より）

【小学生】

中学生の先輩から説明を受けたり、交流を通じて、「自分もこんな中学生になりたい」という目指すべき姿のイメージ化を図ることができるようになった。

【中学生】

小学生に何をどう伝えるかを自ら工夫する姿が見られるようになり、自主性や自治的な態度が育った。また、小学生に説明したりする中で、自尊感情が芽生えた。

さまざまな小中連携の取組を通して、このようなプラスの変化を「醸成」していったと言える。

札幌市研究開発事業『小中連携』の方向性の検討資料（案）

【土台】平成24･25年度の実践（真栄地区）

【成果】

- ○ 真栄地区における小中連携の具体的な取組を確立できた。
- ○ 異校種に対する意識、小中連携に対する教職員の意識が向上した。
- ○ 目標ができたり、自己有用感が芽生えたり等、児童生徒に変化が見られた。

【小中連携を継続していくために】

- ○ 小中連携を推進していくコーディネーターを各校に位置付ける。
- ○ １年間の見通しをもって、早い段階で打合せを行う。
- ○ 小中合同の研修会を行い、共通理解を図る。

【目的】

① 小学校から中学校への生徒指導に関わる接続を円滑化すること。
② 小学生の中学校進学に対する不安感を軽減すること。
③ 異校種間の触れ合いによる自尊感情の醸成。
④ 義務教育の目的（学校教育法）、目標（教育基本法）に掲げる資質、能力、態度等をよりよく養う。
⑤ 義務教育段階の教職員であることの認識向上。

【実感】

- ○ １年目は手探り状態であったが、２年目になると見通しをもつことができ、スムーズな小中連携の取組ができた。
- ○ 小中連携に取り組んでいく過程の中で、その成果を実感することができ、小中連携の必要性を理解できた。

平成26年度

① １区・２区からモデル校をそれぞれ公募し、決定。各中学校区の実態に合った小中一貫教育の在り方について研究。
② テーマを一つ設定して研究。**「広く実践可能な指導方法例の構築（案）」**
　・ **「乗り入れ指導」と「複数学年での合同授業や活動の実施」**
　・ **「交流」「連携」「接続」の区別**
③ 校長会との連携。
④ 市内の小中連携実践校における指導方法の状況把握。（市教委）

5か年で目指す札幌市の小中連携像

★各中学校区の小中一貫カリキュラムの確立と実施に向けた土台の完成。

- **札幌市の１０区全てにおいて、モデル校による実践事例を確立（アンケート等による成果検証含む）。**
- **小中連携における五つの研究テーマについて、札幌市の指針として各学校に提示。**

平成27年度

① ３区・４区からモデル校をそれぞれ公募し、決定。各中学校区の実態に合った小中一貫教育の在り方について研究。
② テーマを一つ設定して研究。**「小中連携の充実を図る学校間の連携・協力体制の在り方（案）」**
③ 校長会との連携。

平成28年度

① ５区・６区からモデル校をそれぞれ公募し、決定。各中学校区の実態に合った小中一貫教育の在り方について研究。
② テーマを一つ設定して研究。**「小中連携の充実を図る校内体制の在り方（案）」**
③ 校長会との連携。

平成29年度

① ７区・８区からモデル校をそれぞれ公募し、決定。各中学校区の実態に合った小中一貫教育の在り方について研究。
② テーマを一つ設定して研究。**「小中連携を位置付けた教育課程の在り方（案）」**
③ 校長会との連携。

平成30年度

① ９区・１０区からモデル校をそれぞれ公募し、決定。各中学校区の実態に合った小中一貫教育の在り方について研究。
② テーマを一つ設定して研究。**「小中連携を通した地域とともにある学校づくりの在り方（案）」**
③ 校長会との連携。